

博士論文概要 「環境情報からのメッセージ」 自然環境専攻

名前	指導教員	論題	論文要約
<p>ファルク エムディー ハサン</p>	<p>松田裕之</p>	<p>バングラデシュのヒルサ (<i>Tenualosa ilisha</i>) 資源とヒルサ刺網漁によるデータに乏しい混獲資源の脆弱性評価</p>	<p>バングラデシュのヒルサ刺網漁では、対象種であるヒルサ (<i>Tenualosa ilisha</i>) を含む合計 130 種が報告されており、混獲された 74 種の資源とヒルサについて、生産性感受性分析 (PSA) を用いた脆弱性評価を行った。ヒルサは刺網漁に対して中程度の脆弱性があることがわかった。混獲資源の大部分は、漁業への影響を強く受けることがわかった。この研究では、乱獲に関連する撈取率が脆弱性 (V) スコアに対応していることが示唆され、$V > 1.8$ の種はほとんどが漁獲量の減少傾向を示した。この分析により、種固有の生活史特性に関するデータ収集の改善の必要性が強調された。我々が分析した魚種について、PSA の保守的な評価基準が種の脆弱性を過大評価する可能性が示唆された。</p>

川上美宇	和仁良二	後期白亜紀リトセラス類(頭足綱アンモナイト亜綱)における成長を通じた殻の形態変化にもとづく生活史の復元	アンモナイト類はデボン紀から白亜紀末にかけて生息していた絶滅した頭足類の一群である。多くのアンモナイト類において孵化した直後は浮遊性の生活型であったことが示唆されている。本論文では、後期白亜紀リトセラス類のアンモナイト類における、成長を通じた殻形態と成長初期の生活史との関係を議論した。隔壁間隔と螺環拡大率の解析から、リトセラス類は浮遊性の期間が他のアンモナイト類よりも長く続いたことが示唆された。
夏川遼生	松田裕之	生物多様性指標としての頂点捕食者の有効性評価	生物多様性指標の特定は効率的な保全計画の立案に重要である。頂点捕食者は生物多様性指標として提案されているものの、その有効性には一貫性がなく、明確な結論が得られていない。本研究では、事例研究と文献研究によって生物多様性指標としての頂点捕食者の有効性を総合的に検証し、彼らが優れた指標となることを実証した。さらに、頂点捕食者との相互作用が強い分類群を対象とした場合は有効性が向上し、捕食者との相互作用が弱い分類群を対象とした場合は有効性が低下することを確認した。結論として、頂点捕食者は生物多様性指標の有望な候補であるが、実用の際には、捕食者と保全対象となる分類群間の相互作用を確認する必要があることが明らかとなった。